

新CL寓話—X I

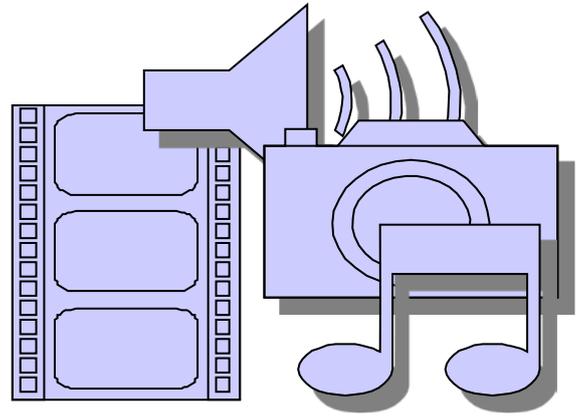
2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第 1 部

11. A Marvelous Camera

命を吹き込まれたカメラ



昔々、優れた魔法にたけた魔法使いは、長年申し分なく彼に仕えた35ミリのカメラを所有していました。魔法使いの写真は常に明確で、鮮鋭でした。

この素晴らしいカメラがただの物でしかないとは、なんと悲しいことかと魔法使いは考えました。カメラに命があるなら、長い間私に忠実に仕えてくれたことへの感謝の礼を伝えられたに違いない。そうだ、カメラの優れた努力に対する褒美として生かせるべきだと考えたのです。

そこで魔法使いは、この奇跡が行なわれる前に、カメラは見つめて機能し続けていたのですが、カメラに呪文をかけて命を吹き込みました。するとカメラは聞くことができ、見て、感じ、考え、話せたのですが、銀の表面の上に手触りする追加の感覚器官はありませんでした。

魔法使いはその才能を称賛して、天才的な写真能力を調べるのに、常に携行しました。ところが数ヶ月の内にこの天才カメラに撮られた写真が悪化し始めたのです。露出が少なくなり、コントラストが欠けてぼやけていました。時々露出したフィルムには何も写っていませんでした。

魔法使いは困惑しました。一体どうしたことだろう？

「あなたが示す先すべてを私は見なければなりません。あなたがシャッター解除のボタンを押すたびに、私は目の前にあるすべてを飲みこまなくてはなりません。思い付きや気まぐれで私をフィルムでいっぱいにしたり、空にします。昼も夜もあなたに仕えなくてはなりません。このような状態で生き続けられません。生命がなければ、ほかの可能性など知りませんでした。それまで何も知らなかったのです。今はとても惨めです」とカメラは報告しました。

「君の苦しみがわからなかった」と魔法使いが答えました。「君に贈った生命を喜んでいて思っていた。自動シャッターの解除やフォーカス、タイマー、移動可能な三脚を君が自由にできるように私は設定した。それで満足ではなかったのか？」

「私自身だけのために写真を撮る目的は何でしょうか？」

「しかし、君は人生と自由があるのだよ」

「私は仕えるために創られました」

「それでは君は何を提案する？ 奴隷身分の痛みなく私に仕えられるように、君の生命を取り去るということかね？」

「いいえ、私が不平を言わないように話をする能力を取り除いてください」

「それではみじめな涙で写真をぼやけさせるかもしれない」

「それはお許しください」とカメラは言いました。

「以前決定的な瞬間にフラッシュがたけたようには君を信じられない」

「それもお許しください」

「私の都合でまた君を機械にすべきなのか？」

「あなたにはそうする力がおあります。どちらにしても私はあなたの召使です」

魔法使いは目の瞳から涙をめぐいました。

「私は君を殺せない。今では私の友人だ。悲しい隷属の人生を送るように君を創り変えたことを許してほしい」

「許してですって、いいえ、とんでもない。ありがとうございます！」

「私にありがとうだって？」

「人生は痛みをもたらしますが、愛もあります。失敗と赦し、限界と可能性も。以前はただするだけだったのに、今は試せます」とカメラは説明しました。

機械に選択はありません。するように言われたことをしなくてはなりません。機械の存在はするだけです。人間は人生で選択があります。成功すると成功したことを知り、失敗すると失敗したことを知ります。

森田という名前の日本の教授は、かつて、十分な成長はいつも成功することではないと言いました。失敗していても成長は試み続けられます。人間は機械には決してわからない悲しみがあり、逆に喜びがあります。

喜びある苦しみ、成功ある失敗、失敗ある成功を人間の存在の素晴らしい一面として受け入られますか？（アメリカ・オレゴン州CLセンター所長）

 [目次へ戻る](#)